

## 第3章 研究ノート・提言

## 障害当事者とその家族の視点からみた パーソン論の問題点

阿部 芳久<sup>1)</sup>

パーソン論者は、重度の知的障害者など一定の知的レベル以下の人たちを「人」(パーソン)として認めていない。彼らは、障害者は不幸であり、知的レベルが重度の知的障害者と同程度の動物よりも重度の知的障害者を優位に道徳的配慮をすることは「種差別」である、等の主張をしている。それらの主張に対して、障害当事者であるジョンソンと重度の知的障害のある娘をもつキティがさまざまな観点から反論している。それらの観点を整理することによって、パーソン論に内包する問題点を検討した。

キーワード：パーソン論、重度の知的障害者、人格の定義

### 1. 問題提起と本研究の目的

パーソン論とは、応用倫理学の領域において、我々はいつの時から人(パーソン)であり、道徳的地位を持つのか、という問いに対する答えを見つけようとするものである。さらに、どのような主体に生存権などの権利を認めるか、という問題を論ずる理論である。例えば、Tooley (1988) は「嬰兒は人格をもつか」という論文で、重大な生存の権利を持つのは「諸経験とその他の心的状態の持続的主体としての自己の概念を持ち、自分自身がそのような持続的な存在者であると信じているときに限る」と主張する。このような主張の下では、新生児や重度の知的障害児・者、および認知症の高齢者等は、心的状態の持続的主体としての自己の概念を持つことなどに困難を示すので、生存権をもつ主体から除外されてしまう。

そもそも「パーソン」とはどのような概念なのであろうか。例えば、ピーター・シンガーは、ジョン・ロックが提示した「理性と反省能力をもち、異なる時・所にいても、自分は自分であり同じ思考する存在だと見なしうるどころの思考する知的存在」という定義を引用しつつ、彼自身も「理性的で自己意識のある存在」と定義している(Singer, 1975)。また、シンガーは「人間」について、「理性的で自己意識のある存在」という意味と「ホモ・サピエンスという種の構成員」という生物学的意味とに区別する。「ホモ・サピエンスという種

---

1) 東北福祉大学教育・教職センター特別支援教育研究室

の構成員」には胚、後期胎児、重度の知的障害をもつ子ども、さらには新生児が含まれる。これらの存在は「自己を意識してはおらず、未来の感覚は持たず、他人と関わる能力も持っていない」という理由で「理性的で自己意識のある存在（パーソン）」とは区別される。

そしてそのような区別によって、パーソンと「ホモ・サピエンスという種の構成員」との間には生存する権利にも優先順位が生じることになる。ある存在が『「ホモ・サピエンスという種の構成員」であるという意味で人間であるにしても、その存在を殺すことは不正なことであるとは言えない』とシンガーは主張する。そして、いかなる乳児も一障害があろうがなかろうが一、自らを持続的に存在する独自の実体とみなしうるような存在（パーソン）と同じだけの生きる資格はない、とする。

当然のことながらこのようなパーソン論に対してさまざまな観点から反論がなされる。例えば、Lohannes Paulus II (1995) は「生命の神聖性」の立場から、人間の生命は誕生に先立つ最初の段階を含め、生存のあらゆる瞬間において神聖であり不可侵であることを主張する。そして、生存権に関する限りすべての罪のない人の生命は誰もが絶対的に平等の立場にあることを強調する。

また、パーソン論を構築する前提として、その根拠の脆弱性も指摘される。例えば、トゥーリーが指摘するようになぜパーソンに限って生存権が認められるのか、シンガーの指摘する「自己意識」とは具体的にどのような状態を指すのか、等々その根拠が明確に示されておらず恣意的であるという批判をうけることは避けることができない。

障害当事者とその家族もパーソン論に対して痛烈な反論を行っている。アメリカにおいて障害当事者とその家族が、パーソン論を唱える研究者とパーソン論に関わる論議を激しく戦わしている。本研究では、障害当事者であるハリエット・ブライト・ジョンソンとピーター・シンガーとの論議、および、重度の知的障害の娘をもつエヴァ・フェダー・ケティとジェフ・マクマハンの論議を取り上げる。本研究は、これらの論議から、障害当事者とその家族がパーソン論に対してどのような視点で反論しているかを整理し、それらの視点に立ってパーソン論の問題点を抽出することを研究の目的とする。

## II. 障害当事者とパーソン論提唱者との論議

2002年にプリンストン大学でジョンソンは生命倫理学者ピーター・シンガーと討論会を行っている。その討論会の内容について、ジョンソンは2003年にニューヨーク・タイムズ・マガジンに「言葉で言い表されない会話」(「Unspeakable Conversations」)という記事を掲載している (Johnson, 2003)。彼女は進行性の筋疾患を患っており電動車いすを利用して生活を送っている。サウスカロライナ州チャールストンの弁護士であり障害者公民権運動に深く関わっている。2008年に50歳で逝去している。

## 1. 「新生障害児殺害の選択の容認」というシンガーの主張へのジョンソンの反応

「言葉で言い表されない会話」において、ジョンソンは冒頭、「シンガーは私を殺したいわけではないと言い張っている」と衝撃的な記述をしている。このような切り出しをしたのは、「新生障害児殺害の選択の容認」というシンガーの主張を論議のテーマにしたかったからである。

ジョンソンは、生まれついた時点から進行性の筋疾患を持っている。より幸福になれる可能性の高い別の子どもを産むために両親が私（ジョンソン）を幼児のうちに殺すことは道徳的に正当化されるという見解に、シンガーが傾倒していると受け止めている。ジョンソンがこのように受け止めているのには理由がある。それは、シンガーの著書「実践の倫理」において彼は次のような主張を行っているからである。

あらかじめ二人の子どもを持つようとしている母親が次に障害のない子どもを持つようとして、白血病やダウン症の障害をもつ胎児を中絶することは、胎児を交換可能なもの、代替可能なものとして扱うことであると主張する。そして、一人の潜在的な子どもをもう一人の潜在的な子どものために犠牲にすることであり、中絶胎児が死ぬことによって妊娠可能となる正常な子どもの人生が幸福ならば、それによって十分に補われる、と主張する。死が誕生以前に引き起こされるとき、代替可能性に基づく論議は一般に認められている道徳的信念に抵触しない、と結論づけている。

シンガーのこのような主張の背景には三つの根拠があると想定される。一つは前述したように、『『ホモ・サピエンスという種の構成員』であるという意味で人間であるにしても、その存在を殺すことは不正なことであるとは言えない』という根拠である。この根拠から、胎児を殺すことは不正ではないと考えている。もう二つ目の根拠は、「障害をもつことは不幸なことであり、人間を悪化させる」という考え方を持っていることである。

そのことを例証するジョンソンとシンガーのやり取りがある。そのやり取りとは、どんな乳児も「理性的で自己意識のある存在」ではなく生存権を持たないのに、重度の障害をもつ乳児を殺害することが許容されるが、障害のない乳児を殺害することは許容されないとするシンガーの主張の根拠を探るためにジョンソンが問いつめるやり取りである（Johnson, 2003）。

ジョンソン：「混血児、特にその組み合わせが非白人である場合はどうだろう。障害児と同程度に養子縁組が困難な乳児だと思うが。このような過小評価された乳児の殺処分を認める法律は人種的偏見を正当化するものではないか」

シンガー：問題があることに同意する。「白人が養子縁組できるのに対し、混血児ができないから殺すということは恐ろしいことだ」

そこで、重度障害をもつ乳児が殺害されることは許容されるのに、混血の乳児が殺害されることは許容されないのはなぜか、とジョンソンはシンガーに尋ねる。するとシンガーは、人種による優遇（差別）は不合理だが、能力による優遇（差別）は不合理ではない、と返答する。さらにジョンソンはその根拠を尋ねる。すると、シンガーは「障害があるとその人はより悪い状態になる」と返答する。その返答に対し、ジョンソンは即座に言い返す。

ジョンソン：「私たちは“悪く”なったのでしょうか。私はそう思いません。（中略）私たちは誰も選ばないような制約を受け、その中でも豊かで満足のいく人生を築き上げるのです。他の人が楽しんでいることも自分だけの楽しみも享受しています。世の中が必要としているものを私たちは持っています」

シンガーは、障害は人間を悪化させるという固定観念を持っている。「歩いたり、見たり、聞いたりできること、苦痛や不快をある程度感じないでいられること、効果的な形で意思疎通できること、これらはすべてどのような社会状況でも真の利益である」という逆説的な表現によって、障害は人間にとって不利益なもの、人間を不幸にさせるものという認識を示している。

シンガーのこのような認識に対して、ジョンソンと同様の反論を唱える人物がいる。障害当事者であり画家としても作家としても活躍しているスナウラ・テイラーである。2012年にシンガーがバークレーを訪れた時に、テイラーは彼と面談をする機会を得た。その時のやり取りである（Taylor, 2017）。シンガーは障害が社会一般に及ぼす肯定的効果に関して消極的な姿勢を示している。そのことに対して、彼女は障害が肯定的な側面を持っていると思う、と自分の意見を述べる。それに対して、シンガーは「私はそういうことを聞かれたら、このように問い返すようにしています」と前置きをして、

シンガー：あなたやあなたの子どもの障害を治癒する、たった2ドルで副作用も皆無であることが確認された錠剤を誰かがくれるとしてもあなたはそれを飲まないということですか。私はほとんどの人がその錠剤を使用するだろうと思うわけです。実質的にはすべての人でしょうね。

テイラー：さてどうでしょう。親のほとんどはその錠剤を使いたがるでしょうけど、大部分の障害者自身は使わないと思いますよ（自信たっぷりに）。

シンガー：ということは、あなたは使わないんですか？（明らかに仰天して）

テイラー：使うわけありませんよ！

シンガー：本当ですか？（さらに驚きながら）

テイラー：なぜ私が障害や障害者に価値を見出すのか、なぜ2ドルの錠剤を使わないのかについてなら、山ほど理由を挙げることができますよ。

(中略)

テイラー：障害が世界に対する異なる観点を与えてくれるので障害には価値があると考えられる障害者も多いと思いますよ。

この会話のあとに、シンガーは、ジョンソンも基本的には同じようなことを、つまり、自分は幸せだと言っていたことを思いだす。テイラーは、この会話を通して、障害は多くの場合、障害者の生に溶け込んでいて、障害が存在するゆえ、自分たちが充ちたりた人生を生きることができなくなるわけではない、ということを主張する。

新生障害児を殺害する選択を容認するシンガーの三つ目の根拠は選好功利主義の考え方に基づく。選好功利主義とは、生命の倫理的判断（人工妊娠中絶や安楽死、新生障害児を殺害することなどの判断。以下「生命の倫理的判断」と記す）をする時は、「その行為あるいはその行為の結果によって影響される存在の選好とその行為がどの程度一致するかを問題とする」とシンガーは説明する（Singer, 1979）。

そもそも功利主義とはどのような考え方であろう。それは、人が倫理的判断をする時、自己の利益や好悪の感情を抑えて、ある種の普遍的で公平な観点に立ち、すべての関係者の幸福（利益）を配慮しその最大化を目指すという考え方である。従来の功利主義は、幸福（利益）の内容として快楽と苦痛を重要視していた。すなわち、快楽を最大化し苦痛を最小化する傾向をその行為がもっているかどうかを問題としていた。選好功利主義では、幸福（利益）の内容を、その人の選好とその行為がどの程度一致するかを重要視したのである。

このような選好功利主義の考え方によってなぜ、新生障害児の殺害の選択が容認されることになるのであろう。新生障害児を殺害するかどうかという判断を行う場合、関係する人間は、新生障害児本人と両親である。新生障害児は持続する自我という概念を一度も持ったことがないので、つまり自分を将来を持つものとして考えられないので、自分の将来の在り方についての選好を持つことができない（このことは、障害のない乳児についても同じである）。このことから新生児の選好は無視される。

一方、両親について考えてみる。誕生という通常ならば喜ばしい出来事が、両親やすでに生まれている兄弟の幸福にとって脅威となる障害をもった子どもの誕生の場合はどうだろう。その場合、子どもの死が両親に与える影響は子どもを殺すことに反対する理由になるよりも、むしろ賛成する理由になる。以上のような論理から、シンガーは「選好功利主義にとっても、殺される人に対して加えられる不正は、考慮すべき一つの要因にすぎず、時には他の選好の方がその犠牲者の選好より重要とみなされることもありうる」と主張する。

以上が、障害新生児を殺害する選択を容認するというシンガーの根拠である。このような考え方を持っていることを、彼の著書を読んで知っていたのでジョンソンは冒頭に述べたように、幸福になれる可能性の高い別の子どもを産むために両親が私（ジョンソン）を幼児のうちに殺害することは道徳的に正当化されるという見解をシンガーが持っているかと推測している。

ジョンソンは、自分自身と障害のない弟のマックを比較する。二人は同じ尺度で測れないほど特殊な才能と欠点を持っている。人間は別々の人間だと見なすことによってはじめて一人一人がかけがえのない存在であるという考え方が成立する、そして、それぞれに独自の性格があるからこそ人間は交換不可能なものになる、とジョンソンは主張する。

## 2. シンガーの普遍的視点に対するジョンソンの個人的経験の主張

ジョンソンがニューヨーク・タイムズ・マガジンに掲載した論文のタイトルは「言葉で言い表されない会話」というものである。なぜこのようなタイトルがつけられたのか、論文を読み進めると彼女の意図を理解することができる。

シンガーは、障害と幸福との間に負の相関があることを認めさせようするために、ジョンソンにある状況を提示する。それは、浜辺で他の子どもたちが遊んでいる様子を障害児がみている場面である。シンガーはこのような場面を彼女に想像させることによって、障害のある子どもは楽しむことができず不幸であると認めさせたかったのであろう。それに対して、彼女の少女時代に実際に浜辺で遊ぶ経験をしたが、立ったり歩いたり走ったりしなくても浜辺で楽しく遊べたことを彼女の著書に示したと答える。そして、他の子どもたちと同じように熱狂的な遊びができないことを可哀そうだと思う人がいることは知っていた。しかし、そのように思われるのは悔しいことで、現在でもそう思っていると答える。そして、そのあとに、「もう十分です」と答える。

この「もう十分です」という表現は彼女のどのような思いから発せられたのだろうか。マーク・ホップウッドはその時のジョンソンの心情を、自分の個人的な証言を提示することが彼女にとってできる唯一の方法であるにもかかわらず、シンガーとの会話にこれ以上大きな変化をもたらさないだろうと認識しているかのようなようである、と解釈している (Hopwood, 2016)。

ジョンソンは、シンガーの著書や議論の中での論理の展開の仕方に違和感を感じている。その例は「言葉で言い表せない会話」の論文の中で示している。「彼のきつい三段論法を理解しようとするたびに、私の脳はひどく混乱し、ほとんど楽しくなってしまうのだ。慈悲を！ まるで『不思議の国のアリス』だ」、「いくつかのシンガーの著作を読み、ピーター・シンガーの概念世界の中では意味があることを認めます。しかし、私はそこに行きたくはな

いのです。少なくとも長くはないでしょう」、さらに「彼は、事実と理性から導き出された倫理体系を作ろうとしていると書いていますが、それは宗教、場所、家族、部族、コミュニティ、そしておそらく種という視点を投げ捨て、『宇宙の視点に立つ』ためのものです」と記述している。

この「宇宙の視点に立つ」とは、シンガーの倫理に関する考察の基本的視点である。彼は、倫理的判断をする際には、「倫理が要求することは『私』や『あなた』を超えて、普遍的法則、普遍化可能な判断に達することであり、公平な観察者ないし理想的観察者の立場に立つことである」と主張する (Singer, 1979)。この「公平な観察者ないし理想的観察者の立場」を意味するときに、「宇宙の視点に立つ」という表現を使用している。それを「実践的な問題について理性的に考える時、私たちが自分の視点から距離を置き、代わってより広い見方を、究極的には宇宙の視点すらできる…」と説明している (Singer, 1993)。

シンガーのこのような論理からすれば、新生障害児の殺害という倫理的判断を行う際には、障害者でも非障害者でもなく、この問題を完全に客観的に判断できる公平な視点に立つことが求められる。障害のあるジョンソンは当事者であるので判断する人間として除外されることになる。

また、前述したように「私たちは誰も選ばないような制約を受け、その中で豊かで満足のいく人生を築き上げるのです。他の人が楽しんでいることも自分だけの楽しみも享受しています」というジョンソンの告白も、それはジョンソンの個人的な意見であり、普遍性のあるものではないと否定されることになる。シンガーからすれば、ジョンソンの固有の視点は排除されなければならない。

このようなことがシンガーからの反論として提示されることが十分に想定されたので、ジョンソンの「もう十分です」という言葉が導き出されたものと推測される。

ジョンソンは、彼女の自伝的な著書において、彼女自身の個人的な経験を提示することによって、障害者は苦痛ばかりだという通念を消し去り、十分に楽しんでいるというという「快樂の証人」になることを望んでいる (Johnson, 2006)。例えば、彼女の日常生活において様々な楽しみを描写している。彼女が居住している街の朝の時間帯の太陽が雲の中に出たり入ったりするのを眺める楽しみ、海や花木やレストランの油の匂いを吸い込む楽しみ等を克明に描写している。また、朝の電動車椅子での出勤の時には、「ノーブレーキ」という小さなゲームを作って楽しんでいる。道路の通行パターンを把握し、歩行者信号が点灯した時にタイミングよく交差点に到着するようにする。さらに目的地に向かって猛スピードで突っ走るゲームも楽しむ。観光客がごった返す中、傷んだ歩道を走り回り、ゴミ箱の置かれたよく知った裏道をスタイリッシュに走りぬく。

このような彼女自身の生活を楽しんでいる経験を描写することによって、「障害は苦しむ

ことだ」という思い込みが社会一般の通念として蔓延していることに異を唱えている。

また彼女は、自分の特殊な経験からくる視点を捨て去ることではなく、それを声に出すことであると主張する (Johnson, 2003)。このことは、障害とはただ苦痛であり欠如であるという一般的な観念を覆し、障害者からの視点により社会に新たな概念を提示する可能性を示唆している。前述したスノウラ・テイラーも、さまざまな障害をもつ人々の経験の本来的で内的な性質は、生の質と人格をめぐる従来の議論を根本的に問い直しているのではないかと主張している (Taylor, 2017)。

このように、シンガーの主張する普遍的な視点からではなく、障害者の個人的経験からの視点をジョンソンは重要視する。

### III. 障害者の家族とパーソン論提唱者との論議

パーソン論への痛烈な反論を展開する哲学者の一人としてエヴァ・フェダー・キテイがいる。彼女はニューヨーク州立大学ストーニーブルック校の哲学者で、重度の知的障害のある娘をもつ母親である。彼女はパーソン論者であるジェフ・マグマハンやピーター・シンガーを相手に激しい論争を繰り広げている。

彼女は自分の娘について次のように紹介している (kittay, 1997)。セーシャという名の娘は、33歳で重度の知的障害があり、脳性まひのため話すことも歩くこともできず、最低限の身の回りのこともできていない。しかし表情豊かで音楽や水遊びが好きで、現在グループホームに入居している。

キテイは、重度の知的障害のある娘をもつ母親であり哲学者でもある自分は、認知障害に関する従来の哲学的な扱いについて、母親としての知識と個人的な経験に基づいて批評を行うべきだと判断するに至ったとその決意を述べている (kittay, 2009)。

#### 1. 「人格」に関する知的機能重視の説に対するキテイの反論

キテイは、マグマハンの論文「認知障害、不幸、正義」(Cognitive Disability, Misfortune and Justice) と著書「殺害の倫理：生命の限界の問題」(The Ethics of Killing: Problems at the Margins of Life) において述べられている主張に対して激しい反論を展開している。特に、マグマハンの唱える「身体に根差した心説」(Embodied Mind Account) に基づく理論と「自己利益に関する時間的相対的利益説」(Time-relative Interest Account) に基づく理論によって導いている彼の重度の知的障害者に対する主張を問題視している。

西洋哲学においては、「人格」<sup>1)</sup>についての概念は、伝統的にジョン・ロックが提示した「人間知性論」に由来している (Locke, 1689)。そこにおいて、「人格」とは「理性と反省能力をもち、異なる時・所にいっても、自分は自分であり同じ思考する存在だと見なしようところ



の思考する知的存在」と示されており、神や単なる物とは区別される実体であると示されている。ここで示されている「異なる時・所においても、自分は自分であり同じ思考する存在」とは、将来、今とは異なる場所においても、今の私が将来にわたるまで同一の存在である、ということの意味している。そのことを理解するためには、理解する知性が必要であり、同時に自己意識を持っていることが必要となる。

マクマハンの唱える「身体に根差した心」とは、脳機能によってつくられる意識機能のことである。彼によると「人の存在の同一性」が保たれるための本質的な要素は、脳機能によってつくられる意識機能が維持されることにあるとされる（峯村，2014）。ここで問題となるのは、脳機能が十分に機能していない胎児や新生児、および脳機能に損傷をもった認知症高齢者や重度の知的障害者は、「人の存在の同一性」を保つことができないために「人」から除外されることになる。

さらに、「自己利益に関する時間的相対的利益説」によっても、重度の知的障害のある人たちはその存在を危うくすることになりかねない事態が生じる。この説は、死や殺人に関する議論から派生している。一般的に死や殺人が悪いこととされるのは、死や殺人が我々から価値ある将来の利益（様々な経験や楽しみなど）を奪い去ってしまうからである（江口，2014）。「時間相対的利益説」では、私にとっての利益というのは、私になるべく今の私と継続して生き延びることであり、時間を通して私と心理的に結びついている将来は価値が高く、あまり結びついていない場合は価値が低い、というものである。この説によって、80歳の高齢者の死より20歳の若者の事故死の方が悲劇的で悪いということが説明がつく。80歳の高齢者の残された期間の人生より、若者が将来経験するであろう満ちたりた人生のほうが価値あると思われるからである。

マクマハンも重度の知的障害者の「時間相対的利益」についても言及している（McMahon, 2002）。重度の知的障害者はある種の動物と変わらない認知能力や感情能力しか持っていない。その結果、自己意識も欠如しており、「人の存在の同一性」の認識も欠如している。自分が生き続けることに対する興味も強くない。重度の知的障害者の「時間相対的利益」は強くなく、もしある種の動物を殺害することが許容されるなら、重度の知的障害者を殺害することはそれほど悪いことではない、と結論づけている。同じような主張はシンガーによってもなされている。「正常な人間の特質を欠いている人間の生命は、常に動物の生命より尊重されるべきだとは言えない」と語っている（Singer, 2011）。

さらに、心理的生活の完全性と洗練度を測る尺度によってある閾値を定めた場合、一定の閾値以上の心理的能力をもつ個体は生命に対する権利を有するが、閾値を下回る個体はその権利を有しない。すなわち一定の閾値を下回る動物や重度の知的障害者は生命を享受する権利がないことが認められる、とシンガーは主張している。

当然のことながら、重度の知的障害のある娘をもつキテイは強く反論する。「時間相対的  
利益説」は、ある人の殺害を他の人の殺害と比べて正当性があるかどうかを評価する根拠を  
与えることになる。その結果、重度の知的障害者の生存を低く扱うことになる、主張する。

従来の「人格」概念によると、認知障害のある人たちは生存権が認められない存在になる  
という危険性をはらんでいる。一方で、従来の「人格」概念に該当する人たちが人間社会に  
対して必ずしも善きことをもたらしているわけではないことを彼女は指摘する (Kittay,  
2005)。例えば、ナチスドイツの医師たちは高度な知性と合理性を持っているにも関わらず、  
これらの能力を人間社会の健全な道徳的発展に寄与することはなかった。障害児の安楽死プ  
ログラム「T4作戦」に関わる委員会には当時のドイツの精神医学を代表する医師たちがこ  
ぞって参加している。このプログラムで開発された虐殺の方法が後のアウシュビッツ等の収  
容所における大量虐殺に使用される。ナチスドイツの精神科医たちが人類史上最も非道徳的  
な行為を行ったわけである。

キテイは重度の知的障害のある自分の娘セーシャの行動を対照的な例として提示してい  
る。彼女は合理的精神や自律的精神を持つことはない。しかし、セーシャは人生を楽しみ、  
周囲の人たちと笑顔と笑い声で喜びを分かち合い、自分に関わる全ての人に喜びをもたら  
している。悪意をもったり人を傷つけることをしたことがない。

このことから道徳的地位と関連させ「人格」を定義づけるために、合理的精神や自律的精  
神を重要視していることにキテイは疑問を呈している。そして、認知能力とか心理的能力と  
かの個人の能力のみに注目し、道徳的立場を考察することに異議を唱えている。なぜなら、  
「人間であることは、能力の束ではないからです」と答えている (Kittay, 2009)。道徳的立  
場を考察するうえで、人間の生をいかにとらえるか、人間の多様性や人間同士の関係性など  
人間の全体像を視野に入れて考察することをキテイは求めている。

また、キテイは従来の「人格」概念の代替となる、「人」を「人」たらしめている視点を  
提示している (Kittay, 2001)。「人」であるということは、他の人と一定の関係を築き、他  
の人の接触を維持し自分の世界と他の人との世界を形成するなどの能力、そして、他の人  
が自分と同じ人間であるということを生得的に想像できる能力をもつ存在であると提案して  
いる。このような「人」についての視点は、個人内の知性や合理性、自己意識などの能力を  
重視するのではなく、他者との関係性に着目して「人の特質を有している集団」(personhood)  
の概念の中心に位置づけようとするものである。すなわち、人間社会にみられる、他者への  
気遣いや、他者と形成する人間らしい関係を築くことの独自性を重視する。このように「人  
格」概念の代替となる概念を設けることにより、重度の知的障害のある人たちや、さらに脳  
死状態の人も「人の特質を有している集団」に包摂されることになる(脳死状態の人の事例  
は後段で提示する)。

## 2. パーソン論における動物擁護論の論理展開上の問題点の指摘

キテイがパーソン論に最も否定的な態度、それ以上に怒りの態度を示すのは、シンガーやマグマハンが重度の知的障害者である種の動物（例えば、チンパンジーやゴリラ、犬など）と比較する時である。そのことに対して、嫌悪感を露骨に表現する。例えば、著名な生命倫理学者を招待して開催した「認知障害と道徳哲学に対するその障害の挑戦」という会議におけるキテイとシンガーとのやり取りの場面でそれが現れる（Kittay, 2009）。シンガーへの質問にキテイは次のように答える。「あなたはセーシャと豚とはどう違うのかと尋ねましたよね。私が首を振ると、あなたは事実に基づく質問だから、とおっしゃいましたよね。その質問をされた時、まず私がしなければならないことは吐き気のようなものを克服することです。知的に答えられないのではなく、感情的に答えられないのです」。

### 1) パーソン論における動物擁護の主張

シンガーやマグマハンが彼らの論文や著書のなかで重度の知的障害者を引き合いにだすのは、動物擁護を主張する時である。動物擁護の主張を正当化するために次のような論理の展開をたどる（Singer, 1979）。

- ① 平等の原理が、我々人間の種に属する他の人々との関係のための確固とした道徳上の基本原理である。つまり他の人々に対する我々の配慮は、それらの人々がどのような人々とか、どのような能力をもっているかということに左右されてはならない。
- ② この平等の原理が道徳上の基礎であることを認めた以上、我々自身に属さない人間以外の動物との関係のためにも平等の原理が道徳上の基礎であることを認めなければならない。
- ③ ところが、ある種の動物と同じレベルの能力しか持たない重度の知的障害者が擁護されているのに対し、動物には食物にするために大量に飼育し虐殺されたり、実験台されたり等、さまざまな不当な扱いを受けている。これは「種差別」ではないか。
- ④ この「種差別」を解消するためには、重度の知的障害者が受けている扱いと同等の扱いを動物も受けるようにすることが道徳上、必要になる。

シンガーは、上記の③の内容を次のように説明する。「自己意識や自律的な特質によって人間と他の動物とを隔てる大きな溝にするなら、より能力の劣る人々をこの溝の向こうの動物の側に置くことになる。そしてもしこの溝が道徳上の身分の違いを示すものと見なされるなら、これら障害をもつ人々の道徳上の身分は人間よりむしろ動物と同じことになるであろう」と前提条件を示したうえで、だからと言って、知的障害者を動物に対して行っているように実験台にすることはできないし、そうすることは不正であると主張する。さらに「障害のある人々と同程度の自己意識をもち同様に苦痛を感じる如果能够なら、このような動

物を実験台にすることも不正であると確信する」と結論づける。そして「私の議論の目的は、誰であれ人間の地位を引き下げるのではなく、動物の道徳上の地位を高めることである」と結論づける (Singer, 1979)。マクマハンもシンガーと同様の論理で、重度の知的障害者に苦痛を与えたり傷つけることが間違いであるなら、同等の能力をもつ動物に危害を加えることも間違いであると主張している (McMahan, 2002)。

さらにマクマハンも、ある種の動物と同程度の重度の知的障害者がその動物より優遇されているのは、重度知的障害者が我々と同じ種に属しており我々と重要な絆を構成している信じられているからであり、また、人類に属することは特別なことだと信じられているからだと主張する。しかし、同等の能力をもつ動物と重度の知的障害者に対する扱いの違いは、我々と特別な関係があるからといって、正当化することはできないと主張する。人間の種の構成員であることは純粋に生物的な関係であり、家系やゲノムの類似性、あるいは交配の問題であり、道徳上重要であるとは考えにくい、と付け加える。そして、もし知的で道徳的に感受性の高い火星人が地球にやってきたとしたなら、我々が同等の能力をもつ動物を扱うのと同じように重度の知的障害者を扱うことは正当化されるだろう、と結論づけている。

マクマハンの主張でもう一つ付け加えたいのは、自分の種のメンバーへの偏愛は、自分の種に属さない生物の生命と幸福に対する感受性を低下させると主張していることだ。このことはナショナリズムの場合にも同様な現象を見出すことができる、としている。ある国家の構成員の間に連帯感が生まれるとアイデンティティを構築するようになる。そのアイデンティティはしばしば他の国家の構成員を劣った存在として軽蔑するか憎むべき存在とさへみなすようになる。このように民族主義的な連帯が維持されると、ユーゴスラビアやその旧州などでは、その結果、しばしば大規模な残虐行為が行われるようになる。マクマハンも、人間の種の偏愛と民族主義を同一視し、民族主義が膨張し他の国家への残虐行為に発展したように、人間の種への偏愛が動物への虐待へ影響を与えるというアナロジーを用いている。

## 2) キテイによるパーソン論の動物擁護の主張のための論理展開への反論

以上のようなシンガーとマクマハンの動物擁護を主張するために、重度の知的障害者を引き合いに出して論理を展開することに、キテイは以下の観点から反論している。

### (1) 論じる対象の理解が欠落している

マクマハンが動物擁護の主張を展開するときに、重度の知的障害者を次のように記述している。重度の知的障害者は自意識を持たないばかりか、環境と他者に対してほとんど無反応な人間であり、深い個人的・社会的関係、創造性、達成感、最高級の知識の獲得、美的快楽などができない、と表現している。そして、ある種の動物と重度の知的障害者との間には道

德的に重要な本質的な差異がなく、このことは多くの人が直感的に納得してもらえるものと信じている、と主張する (McMahan, 2002)。

このような重度の知的障害者へのマクマハンの理解は、まったくの間違いであり事実からかけ離れているとキテイは反論する。そして反論を裏付けるために、自分の娘セーシャや彼女と同じグループホームの仲間の日常的な様子を紹介している (Kittay, 2005)。

娘のセーシャは重度から最重度の知的障害と診断されているが、家族や長年世話をしてくれる人とは深い人間関係を築いている。セラピストや遠い親戚、キテイの友人とも友好的な関係を築いている。見知らぬ人とは内気な傾向があるが、イケメンには特別な好意を抱いている。音楽は彼女の人生そのものであり、ベートーベンの「皇帝」の協奏曲を聴きながら窓の外をうっとり眺め、時折、曲の優れているメロディーの箇所を予感して眼を輝かせる。セーシャのグループホームの仲間も同様に音楽に対して心地よい反応をしている。ピリーはロックミュージックに合わせ、車椅子でダンスを踊っている。トニーはある音楽には興奮しある音楽には涙する。また、レット症候群と診断されてある女性は、父親が重病で死ぬと聞かされると涙して座ったままだった。他の青年は母親と姉から父親の死を知らされた時、悲痛な叫び声をあげていた。

重度の知的障害者は深い愛着を持つことはできない、美的快樂はできないというマクマハンの重度の知的障害者の理解は事実と完全に異なっているとキテイは断言する。このように事実と異なった憶測に基づく論理構成は、人間の生命を問題とする倫理学において許されるものではない、と付け加える。

また、キテイはマクマハンが重度の知的障害者と犬の認知能力を比較して、同等であると記述していることについても言及している。重度の知的障害のあるセーシャも犬も知能検査によって知能指数を測定することはできない。しかし、セーシャは音楽に対する反応や人に対する感受性は驚くほど損なわれていない。セーシャの能力は非常にアンバランスであり、このようなことが多くの重度の知的障害者に観察されることである、とキテイは語っている。セーシャが何もできない、理解できないということではなく、セーシャが持っている潜在的な能力に関する我々の知識が限られているということが事実であろう。犬も同様に人間には見られない特有の認知能力を持っているはずである。長年にわたって犬と接してきたトレーナーであれば犬の認知能力やその限界の程度も理解しているはずだ。であるから、犬の認知能力と重度の知的障害者の認知能力を比較すること自体、そもそも認識論的に間違っている。それ以前に、何よりも論じる対象についての事実に基づいた理解が欠落しているとキテイは断言している。

## (2) 論理展開の方法的問題

マクマハン、人間の種の偏愛と悪質な民族主義を同一視して、民族主義が膨張し他の国家への残虐行為に発展したように、人間の種への偏愛が動物への虐待へ影響を与えるというアナロジーを用いているが、キテイはそのアナロジーについても釘を刺している。マクマハン、人間の種の偏愛の例として、動物に対しては根本的に「他者」であるという認識から注意を払って接するという感受性が麻痺しているが、動物と同等な重度の知的障害者に対しては、親近感から細心の注意を払って接すると述べている。それに対し、キテイは自分がセーシャに接する態度は、人間の種に対する偏愛ではなく、個人的な愛の関係によってもたらされるものであると述べる。

そして、動物への虐待の根本的な原因は、人間社会の一般的な強欲と無神経さである、と主張する。このキテイが示す「一般的な強欲」とは経済的な利益だけを追求する態度であり、また「無神経さ」とは、生命に対する無関心さ、他の人が置かれている状況に対する想像力の欠如と解釈できる。すなわち、動物を使用して実験したり、大量に飼育して食料にする行為は、人間社会の一般的な強欲と無神経さによるものであるとキテイが解釈していると推測される。

このような強欲と無神経さは、動物だけではなく重度の知的障害者に対しても向けられてきたとキテイは指摘する。その例としてウイロブロック事件について触れている。その事件とは、ニューヨーク大学のソール・グルーマン博士とその研究チームが1956年から1972年にかけて、ニューヨーク州スタッテン島にあるウイロブロック州立学校において肝炎ウイルスを入所者（3歳から11歳）に人為的に感染させる実験を行った事件である。その学校はIQが20以下の重度の知的障害児が73%も占める時期があった。人体実験の結果、ガンマ・グロブリンが肝炎予防に効果があることが判明した。しかし、最終的には750人から800人の知的障害児が人為的に肝炎を感染させられている (Fachen, & Beachamp, 1986)。1949年には入所者の数は200人程度だったが、年々増加の一途をたどり1963年には6000人以上にも膨れ上がっていた。この施設は1987年に閉鎖されることになったが、それまで劣悪な環境に居住させ、入所者を裸または粗末な衣類で放置したり、椅子やベッドに縛り付ける、性的暴行を繰り返すなど、職員による虐待が日常的に行われていた。さらに、学校が閉鎖された後にグループホームに移住したが、そのグループホームでも殴るけるなどの暴行を日常的に受けていたり冷水のシャワーを浴びせられたりして虐待を受けていた (DAILY SUN NEWYORK, 2020)。

この事件について、キテイは、学校が知的障害児を良識をもって教育する資金を拒否したことがこのような事件を起こした一因であると指摘している。重度の知的障害児の教育や治療に充てる経費を削減する意図があったものと思われる。また、グループホームについても、

利益を追求するあまり、無能で心無い職員によって、首都（ワシントンD・C）の中心で知的障害者が放置され死んでいく結果になったと断罪している。

このように、動物への虐待を人間の種への偏愛と悪質な民族主義を同一視してとらえるマクマハンの論理展開について反論を行っている。

### Ⅲ. ジョンソンとキテイの共通の問題意識

#### 1. 障害者の幸福感について

前述したようにシンガーは、障害は人間を悪化させるという固定観念を持っており、障害は人間にとって不利益なもの、人間を不幸にさせるという認識から離れられない。マクマハンも障害についての幸福感に関してシンガーと同様な考えを持っている（Mcmahan, 1996）。

一般的な見解と前置きして、重度の知的障害者は実に不遇であるか窮乏した生活をしているか、最低限の生活をしているとされる、としている。自分が存続するために完全に他者に依存しており、無視や虐待に対して脆弱である。彼らの不幸は、幼児期の状態が、青年期、成人期といつまでも継続することである、と述べている。さらに、最も重要なことは、ごく初歩的な認知・感情能力しか持たない個人は必然的に幸福に対する能力が大きく制限される、と主張する。すなわち、個人における幸福の形態とレベルの範囲は、その個人の認知的、感情的能力と潜在能力によって決定されるからである、としている。

重度の知的障害者は不遇であるか窮乏した生活をしている、最低限の生活をしているとされる、無視や虐待に対して脆弱であるというマクマハンの指摘は前述したウイローブロック州立学校のような劣悪な、人権が無視された環境においては確かに当てはまるであろう。しかし、重度の知的障害児のこのような状態が一般的な姿であるとマクマハンを信じているのだろうか。

キテイの娘セーシャは重度の知的障害があるが、仲間たちと生活を楽しみながら生活している。音楽、特にベートーベンの「皇帝」の協奏曲を愛し、周囲の人たちと情愛のあふれた関係を築いている。セーシャが住んでいるグループホームの施設長は入所者の尊厳を最大限尊重する姿勢を示している。そのことはキテイがグループホームを訪れたときに目撃したあるエピソードに基づいている（Kittay, 1997）。

個人の幸福の形態とレベルの範囲は、その個人の認知的、感情的能力と潜在能力によって決定される、とするマクマハンの主張はキテイの娘の場合はまったく当てはまらない。

マクマハンが動物擁護の主張を展開する際に動物と重度の知的障害者を比較し、動物と同等の認知能力しか持たない重度の知的障害者は不幸な存在である主張している。そのことに、キテイは怒りを感じているが、逆に動物にとっての幸福とはどのようなものであるかについ

て論じている (Kittay, 2005)。その動物とは、出生時に遺伝的に強化され、大人になってから11歳の子どものような認知能力を身に着けたチンパンジー（「スーパーチンプ」と呼んでいる）である。スーパーチンプはその後、強化された能力を失い、普通のチンパンジーに戻った。マクマハンが、スーパーチンプがこれらの強化された能力がもたらす利益を失うことは最も不幸であると論じていることに対し、キテイは異論を唱えている。不幸なのは強化された能力がもたらす利益を失うのではなく、普通のチンパンジーに戻る前にチンパンジーの集団社会が提供されない限り、スーパーチンプは不幸な存在であると論じている。スーパーチンプがいかにスーパーであっても、人間のコミュニティーにはほとんど居場所がない。チンパンジーは社会的動物であり他のチンパンジーとの社会的関係や性的関係、子育ての可能性を失っては、不幸な存在と言えよう、と語っている。キテイは、幸福になるための前提として同じ種どうしの関係性が不可欠であることを重視しており、その視点がマクマハンには欠落していると主張したかったのだろう。

一方、知的障害はないが身体障害の重度なジョンソンは、チャールストンの弁護士で社会保障給付を受けることのできないクライアントを支援することを専門としている。また障害者の権利運動にも関わっており、チャールストン郡の民主党の議長も務めた。また私生活においても、前述したように自分の生活の中で楽しみを見つけ、公私ともに充実した生活を送っている。

彼女は、シンガーの「障害は人間を悪化させる」「障害と幸福の間に負の相関がある」という主張に対し、障害の有無がその人の生活の質を予測するものではないと反論する。生活の中で一定の制約はあるが、他の人々が喜んでいる楽しみや自分自身の楽しみも享受していると語る。そして、浜辺で遊んでいた少女時代に自分が他の子どもたちのように遊べないことを可哀そうと思う人がいることを腹立たしく感じたし、現在もそう思っている、と語る。彼女は自分の使命として、自身の個人的な経験を語ることにより、十分に楽しんでいるという「快樂の証人」になることを望んでいる。

ダウン症のある子どもの母親も、今の社会では「障害をもって生きることが不幸」という認識が一般的であることに苛立ちを感じている (玉井, 1999)。ほとんどの親が多少の時間はかかっても、そしてその時間のかかりかたには個人差があるにしても、「この子がいてよかった」と障害をもったわが子の存在をポジティブにとらえられるようになっていく。「障害」をもっていることそのものが「不幸」なのではなく、「障害」をもっていることを「不幸」だと思えないこと、そのことこそが「不幸」なのだという実感を持っていると語る。

そもそも「幸福」あるいは「不幸」の概念をどのように捉えたらよいのだろう。「幸福の追求は人間にとって自然的かつ不可避な要求であるが、その内実は個々の主体の在り方に依存するために、幸福概念の一義的な規定は困難である」と捉えるのが妥当であろう (廣松ら、



1998)。どのような状態を「幸福」あるいは「不幸」と捉えるかに関しては主観的なものであり、個人差があるということである。「幸福」あるいは「不幸」の感じ方は、個人の生活経験や価値観、社会的状況によっても影響を受けるであろう。障害があるなしに関わらず、他者からみて幸福そうに見えた人でも、自身は不幸であると感じている人も少なからず存在する。その反対も然りである。

そもそもシンガーやマクマハンが、他者である障害のある人を見て、一般的な概念にとらわれて「不幸」と断言すること自体が間違いである。人間は、自分の置かれている状況に適応して、自分の喜びや楽しみを見出していくということが事実であると思う。

## 2. 障害者の視点から見えてくる新しい知見

シンガーやマクマハンの普遍的立場に立つ論理的世界においては、障害当事者であるジョンソンや重度の知的障害のある娘をもつキテイの個人的経験からの主張は、あくまでも個人的経験であり障害者に一般化されるものではないとされる。それに対しジョンソンやキテイは障害者本人の深い内省や、障害者との深い人間関係から、従来において考えられてこなかった新たな視点が創造されるのではないかと考えている。そのような視点は従来考えられてきた生の質や「人格」の概念に疑問を提示し、すべての人を包摂する新たな概念を創造するのではないかと考えている。

ジョンソンは、自分の特殊な経験からくる視点を捨て去ることではなく、それを声に出すことであると主張する。一方、キテイは、重度の知的障害のある娘セーシャとの深い関りを通して、哲学者として自分の理論を深めることができたと自覚している。「私の娘から学ぶ」(Learning from My Daughter)というタイトルの本さえ出版している(Kittay, 2019)。また、セーシャと生活を共にしている過程で、思考や合理的な考察、初歩的な会話に必要な高い認知能力は、人間の条件であり、そして最高の価値に関与するものであると従来の哲学では捉えられているが、それらは部分的なものでしかないということを、大学院時代にセーシャから教えてもらったと語っている(Kittay, 2000)。

彼女の代表的な著書「愛の労働あるいは依存とケアの正義論」では娘セーシャの事例を多用しているが、その目的として娘の経験を省察の材料として、生の現実から遊離するのを防ぐこと、および重度の知的障害児の母親にとっての意味について考察を深め、もっと一般化して考えることであるとしている(Kittay, 1999)。

ジョン・ロールズの「正義論」は現代リベラリズムの代表的な著書であるが、キテイはこの論で述べられている「正義」の対象について疑問を呈している。この理論はその出発点に、正義の対象となる成員は「すべての人が正義の原理を尊重する能力と、全生涯を通じて社会的協働が可能な成員」であることを理念としている(Rawls, 1971)。そして、そのような

成員は、厳密には道徳的人間であり、このような人間が平等な「正義」を受ける資格があるとしている（ここにおける「正義」とは、国家による社会的最低限の暮らしが保障される分配的正義すなわち基本財をさす）。そして道徳的人間は二つの特徴を持っている人間であるとする。一つは自分の善の概念を認識し追求することができることであり、二つ目は正義の原理を適用しそれに基づいて行為したいという願望を最小限度までは持つことである。すなわち、この特徴を持つ人間は合理的で理性的であるということを前提としている。このような人間を対象とした場合、理性的、合理的、推論的能力を著しく欠いた人間は一健康上の特別なケアを必要とする人、知的障害者、認知症高齢者など—「正義」の対象から除外されてしまう。自分の娘セーシャもその中に属してしまう。それは生存権も否定されることを意味している（Kittay, 2005）。

一方でキテイは娘を育てる経験から、すべての人間にとって不可避で普遍的なケアの存在に注目し、ケアがどのような形で分配されることが「正義」に適うかについて検討した。彼女は、すべての人間は誰かからケアされないで育つことができず、病気や加齢による看護や介護を必要とするために「依存」（誰かがケアしなければ生命を維持することが困難な状態）を人間の条件の一つであるとした。「依存」が人間の条件であるなら、ロールズが唱える「正義」にケアに関する基本財（例えば、自分自身が依存しはじめたならケアしてもらえること、等）も含まれるべきであると主張する。こうしたケアに関する基本財を保証する社会は誰もが安心して暮らすことができる社会であり、そのような社会を構築することを目指すべきである、と主張する。

以上が「愛の労働あるいは依存とケアの正義論」で主張されていることであるが、その後の論文でキテイはパーソン論や従来の西洋哲学で主張されてきた「人格」の概念の代替となる概念を模索している。それは、すべての人間が「正義」の対象となるために不可欠なことであるからである。

もし伝統的な「人格」の概念が娘セーシャや彼女と同じ障害をもつ人々を包含するものでなければ、新しい定義を必要とする、と主張する（Kittay, 2005）。「娘は『人』(person)である。何しろ私の娘だから。娘が『人』でないわけないだろう」という思いがキテイの哲学の根底にある。

そこで、前述したように、「人」であるということは、他の人と一定の関係を築き、他の人との接触を維持し自分の世界と他の人との世界を形成するなどの能力、そして他の人が自分と同じ人間であるということを生得的に想像できる能力をもつ存在であると定義する。「人」について、従来の「人格」のように個人内の知性や合理性、自己認識などの能力に視点を置くのではなく、他者との関係性を重視して「人」の概念を位置づけようとする。

キテイの以上の哲学的作業は、ロールズの「正義論」における「正義」の対象を一定の条

件を備えた人だけでなく、すべての人への拡大しようとする試みであると言える。

### 3. 脳の機能停止した子どもの介護についての論議

ジョンソンとシンガーのやり取りにおいて、意識が永久に回復しない10代の少女を介護することについて意見が交わされた。ジョンソンが訪問した家の家族は無反応なその娘に愛情をもって接しているとシンガーに話す。その話を聞いて、シンガーはジョンソンに次のように質問する。「本人が完全に無意識であることを証明でき、意識を回復しないことを証明することができるかと仮定しよう。仮にそうだとすると、その人の世話をし続けるのはちょっと変だと思わないか?」。その質問に対してジョンソンは「いいえ、正しく行われればそれは深く美しいものになるかもしれません」と答える。

シンガーの論理体系からすれば、脳の機能が停止して意識をもたないのだから、この少女はパーソンではなく、世話をして生命を存続させることは、選好功利主義の観点からすれば意味のないことになるのだろう。現にその後シンガーは、「家族の一員に世話をすることが強いられ、働くこともできず、自分自身の生活をもつこともできないのではないかと」ジョンソンに言い返す。

一方、ジョンソンは、正しく行われればそれは深く美しいものになる可能性がある、と答えている。二人のこの違いはどのような要因で生じるのだろう。ホップウッドは、このシンガーとジョンソンのやり取りを分析し、この家族への娘のケアが美しいと知るためには実際にその状況を見て、直接体験しない限りこの家族の行動の美しさを証明できないだろう、と語る (Hopwood, 2016)。

シンガーの常識では、意識のない生命を生かし続けることは社会的コストがかかり、家族もそのような負担を引き受けることは望まないだろうと考えている。しかし、ジョンソンは家族がその娘に愛情をもって接している姿を直接目撃するという経験をもつ。ジョンソンが「それは深く美しいものになる可能性がある」と語った彼女の思いの深層には、母と子の間に存在する深い愛情—それは障害がもたらした悲しさや葛藤を乗り越えた畏怖の念さえ喚起するもの—を感じ取ったのかもしれない。あるいは、実際に介護の現場を目の当たりにしたことで、抽象的な説明では見えてこない、この家族の行動にある種の価値を見出すことができたのかもしれない。

ホップウッドはさらに、これらの行動を直接体験することで、何が価値あるものなのかというこの理解を根本的に見直す契機になるかもしれない、また、このような体験は道徳的な変革をもたらし、障害、愛、共同体の問題を見直すことになるだろう、と主張する。

また、浜野もジョンソンとシンガーのこのやり取りに注目している (浜野, 2019)。浜野はジョンソンの発言について、彼女の想像力とそれまで培ってきた感受性を動員して、われ

われの感受性や想像力に訴えてわれわれの深部に訴える言葉を発している、と語る。そして、それは「ある人間の在り方に触れるもの」であると言葉を添えている。一方、シンガーの発言に対しては、生きた人間の肌触り、温もりがそぎ落とされ、人間どうしの繋がりで生まれる通常の理解を超えた現実の様々な可能性に関する想像性が機能しなくなっているかのようである、と語っている。

脳の機能が停止した子どもを世話をする事について、キテイも無能児のケアをすることは道徳的にそして感情的に適切である、と語っている (Kittay, 2005)。その子は母親の胎内で育っていた子であり、その子のために母親は犠牲を払い苦勞した子である。その子が胎内に宿った時点から自分の一部分として緊密な関係が結ばれる。たとえ母親の胎内に数か月いただけでもそれは密度の濃い人生と生活の「共有」である。意識がない子どもでも母親にとっては自分の子どもであり、人間である。しかもまだ心臓は動いており、温もりもある。キテイは重度の知的障害のある娘の母親である。その娘を育てた経験から、無能児をケアする母親の心情を十分に理解でき、その子をケアすることは母親にとっては価値あることであり適切であると判断していると思われる。

我が国で同じような事例がある。2歳8か月まで順調に成長していた有里さんが、突然高熱が出て痙攣重積になり、「脳死状態」と医師から宣告される。有里さんが亡くなる直前に両親が駆けつけ有里さんに声がけすると動かなくなった心臓が正常な動きに戻るという奇跡的なことが起こる。また、看護師たちが仕事で辛いことや悲しいことがあった時、有里さんの部屋にこっそり来て有里さんに話を聞いてもらうということがあった。それが癒しの時間になったというのだ。母親は、娘の存在が家族にもまわりにも大きくなっていった、有里との一日一日が尊い時間となり、有里の心臓の鼓動が聞こえることが自分たちの生きる源になっていった、と語る (中村, 2009)。

ジョンソンが関わった無能児をケアする母親も、日常的にその子をケアする過程で、何か自分にとって価値あるもの、意味のあるものを見い出しているかもしれない。

シンガーは、上述した意識が回復しない子どもや無脳症の子どもを安楽死することを正当化する (Singer, 1979)。回復不可能な知的障害のために理性的で自己意識のある存在になりえない乳児については、その存在を殺すことは不正なことではない、と論じている。そのような子どもの生存を維持することは子どもも周りの人間も不幸になり、経済的な負担も無視できないものになるということを理由としている。

実際に、そのような子どもの生命を回復させないという判断をする親は実在する。しかし、その判断に至る前に深い葛藤や罪悪感に苛まれるという過程を経ることが多い。妊娠20週前半で生まれ、医療的ケアが必要な重症心身障害児の母親の場合、「心臓が止まったら、そのまま逝かせてください」と医師に依頼する。蘇生させる対応を拒否するという判断をする。

それは子どもが「生かされて可哀そう」という思いからである。そのような判断をする時点では母親本人が不幸になるから、経済的コストがかかるからという考えは入る余地がない。しかし、この事例の場合、母親の判断が適切に医師に伝わらなかったため、医師は蘇生させるという対応をとる。その後、医師や看護師に励まされて、子どもが「生きたい、生きたい」と願っているとこの母親は思うようになる。「この子、生きてくて、いろんなこと乗り越えてきたんだな」と、間違いで救われた命が子どもの強い意志によって導かれたのだと判断するようになっていった（田中，2021）。この事例から見えてくることは、子どもがどのように思っているのだからと子ども主体の判断を母親がしていることだ。すなわち、「生きること」が子どもの望むことであり、子どもにとっての利益であると思うようになっている。そこでは、シンガーの唱える選択功利主義的な考え方はまったく排除されている。

### 3. パーソン論における障害者の存在を否定する論理への抗い

ジョンソンとキテイがパーソン論者であるシンガーやマクマハンに対する姿勢は、障害者の存在を否定する彼らの論理への抗いともいえる。ジョンソンは自分自身の存在を、キテイは娘セーシャの存在を否定する彼らの論理を覆さなければならない。そのためにジョンソンにおいては、その著作で自分がいかに喜びのある豊かな人生を歩んでいるかを語り、障害は不幸であるという偏見をなくすことに尽力を尽くす。一方で障害者権利運動家として障害者を施設に押し込めるあり方を批判し、社会の都合によって障害者の自由な生活を阻害する社会の在り方を改革するために生涯を通して戦った。

一方、キテイは哲学者として、シンガーやマクマハンの論理の不備や欠陥を指摘することによって、さらに、パーソン論が唱える「人格」に替わる概念を提示することによって、彼らを論駁しようとする。キテイがこのようにパーソン論者に対峙する姿勢をとるのは、パーソン論が拡大することによって障害者の存在に悪い影響を与えることを危惧するからである。それは、シンガーとの激論の中で「私にとっては、あなたの著述が公共政策にどのような意味を持つかが問題なのです」と語っていることから明らかである（Kittay, 2009）。また、「重度の障害幼児を『人格』から簡単に排除するという刻印を押すことは、あらゆる偏見と同様に悪質で有害な偏見を強化する働きがあるからです」とも語っている（Kittay, 2000）。アメリカでは（日本も同様である）前述したウイロブロック州立学校で起きた障害児への虐待がいつ再び起こるとも限らないとキテイは危惧しているからであろう。

また、アメリカでは過去に、権威付けられた研究者の論文が障害児・者に悲惨な影響を与えるという事実も存在している。その一例として、軽度の知的障害者は社会的脅威であると結論づけた「カリカック家の家系調査研究」があげられる。この研究を発端として、全米に障害者を対象とした断種法が成立する。この法律のもとカリフォルニア州では1920年代か

ら1930年代にかけて10年も満たない期間に、遺伝性の障害者やアルコール依存症の人たち約45万人が強制断種手術を受けることになった（米本ら、2000）。その後の追跡調査によって、この研究結果は客観性が著しく欠いたものであることが明らかになった。キテイはそのような事実を熟知しているのだろう。

さらに、新生障害幼児の殺害を容認するパーソン論の主張が発端となって、「滑り坂論」が示すように次々と「生きるに値しない」と評価された生命が存在の危機に陥っていくことが想定される。「滑り坂論」とは、悪しきことについてもし最初の一步を踏み出せば、次々にそれに続く過程に巻き込まれ、徐々に（あるいは一気に）悪しき結果に落ち込んでゆくことを避けられない、とする考え方である。児玉は現在の欧米で、積極的安楽死と医師幫助自殺を合理化する動きにこのような傾向があると分析している（児玉、2019）。積極的安楽死と医師幫助自殺の対象は当初、終末期の人に限定されていたが、次第に認知症患者へ、さらに精神障害者、高齢者、重度障害者、知的障害者や発達障害者へとじわじわ拡大し続けていると分析している。これらの変化に伴い、重い障害があつて生活の質が低い生は生きるに値しないという価値観が社会の人々の意識に暗黙のうちに浸透していくように思われる、と危惧している。実際に、イギリスでは近年、重い障害のある乳幼児の生命維持をめぐる病院と親の対立が裁判に持ち込まれ、裁判所の命令によって生命維持が強制的に中止されている事例が多くなっていること<sup>2)</sup>、自己決定能力の有無に関して慎重なアセスメントを要する知的障害者に対して安楽死が行われた事例を児玉は紹介している。

我が国においても、パーソン論を発端として、「滑り坂」を落ちてゆき重大な事件が起こることは十分想定される。重度の知的障害者19人を殺害し26人を負傷させた津久井やまゆり園の犯人、植松聖の言動はパーソン論の主張と通底していることが多い。意思疎通のできない重度の知的障害者をターゲットにし、「宇宙から来た植松だ。こんやつら、生きている意味はない」と言って殺傷を行った（神奈川新聞取材班、2022）。また、障害者は不幸しか作ることができなにかたくなに思い込んでいる。植松がシンガーと同様「宇宙」という言葉を使用しているが、これは偶然の一致であろうか。

ジョンソンもキテイも、重い障害のある人に「生きるに値しない」とレッテルを張られ、その人たちの存在が危うくなることを看過できず、抗いの声を大にしているのだ。

#### IV. 終わりに

ジョンソンのエッセイ「言葉では表せない会話」の最後に、シンガーの論理の展開を「恐るべき純粋さ」と表現している（Johnson, 2003）。この表現は、シンガーが過度に、純粋に論理性や普遍性を求めるあまり、現実の人間社会に悪い影響を及ぼしかねない結論を導いていることを危惧した表現であると推測する。

そもそもシンガーの論理の世界の出発点には、倫理の基準に従って生きる、倫理的判断を下す（人工妊娠中絶や安楽死、新生障害児を殺害することなどの判断も含まれる）ということはどういうことだろうか、という問題意識がある（Singer, 1979）。倫理の基準に従って生きる、倫理的判断を下すことが客観的に承認されるには、普遍的な倫理原則を基盤としなければならない、その倫理原則は家族や親族、その他の互酬的な人間関係といった関係性を超える広い視野が必要である、とシンガーは強調する。

このような考え方を基盤として、シンガーにおいては「宇宙の視点」が、マグマハンにおいては「火星人の視点」が設定される。「宇宙の視点」から見れば、ある種の動物と同じレベルの能力しか持たない人間が道徳的配慮がなされているのに対し、動物は不当な扱いを受けていること（食料にするための大量飼育や屠殺、実験台される等）は「種差別」であると主張する。自分が属する種や集団からなどの視点からではなく、それらから全く独立した、まさに公正な視点、地上に住む人間の様々な思惑から解放された視点に立つことが必要だとする。

シンガーの主張に対してジョンソンは、「シンガーの『種を越えろ』という言葉は、私には到底手の届かない贅沢なもののように思えるのです。私の目標は、自分の特殊な経験から由来する視点を捨て去ることはできない、むしろそれに声を出すことです」と語る。他者の援助なしには生きてゆけない生を歩んできたジョンソンにとって、家族や地域社会との絆は彼女にとって最も重要なものである。他者とともに生きるということが彼女の基本的な在り方だ。

一方、キテイはマグマハンが仮定の例として「合理的火星入」などを使用することは、形而上学的に問題があると指摘している。経験することのないケースや想像することが困難な仮定のケースの例をベースにして論理の展開をすることは、人間を対象とする倫理学の領域では不適切であるとキテイは考えている。例えば、「火星人の視点から」といった時、本当に火星人がそのような視点を持つのだろうか。火星人の視点というのは実は「火星人の視点から」とある人が考えているものであり、実際には人間の視点から捉えているのである。

シンガーやマグマハンが、重度の知的障害者と動物への道徳的配慮を比較して差があるのは「種差別」であるという主張に対して、キテイは重度の知的障害者へのこのような対応は人種差別や民族差別などの対応と異なるものである、と主張する。キテイはここで「人間としての家族」の概念を提示する（Kittay, 2005）。家族は幼児期、障害を含む重篤な慢性疾患時、虚弱な老齢期など、人が依存状態にある時、密接な個人的結びつきにより最もよく助けられる。そして、人が危機的状態にある時、家族愛と忠誠心によって支えられる。重度の知的障害者は「人間としての家族」であり、重度の知的障害者への道徳的配慮が動物と異なるのは、このような「人間としての家族」への配慮に基づくものである、とキテイは考えて

いる。

多くの人が、重度の知的障害者を知的に同等レベルの動物と異なる対応をするのは、彼らが様々な感情をもち自分と同じ肉体をもった存在であり「人間としての家族」とであると認識するように生得的に刷り込まれているからではないだろうか。このような「人間としての家族」という無意識の認識によって人間の間に関連感が形成され人間社会が成立するものと思われる。他者を人間の仲間とみなす能力は、個体の生存にとって必要不可欠だけでなく、人類全体の生存にとっての根幹をなしているものであると考える。

ジョンソンとキテイの思考は、ジョンソンの場合は障害当事者としての自己の生きた経験から、キテイの場合は重度の知的障害のある娘とともに生活してきた経験から生み出されている。現実の複雑で多様な世界の中で生きてきた人間の視点を基礎とした思考であると言える。

キテイは自身の論文で、シンガーやマクマハンの主張を、何よりも論じる対象（重度の知的障害者）について十分理解しないまま、抽象的な紋切り型の理解に基づいて倫理的判断を公表することは知的な謙虚さにつけ傲慢であり、その影響力を考えると極めて無責任であると批判している（Kittay, 2009）

そもそも人間が、人間自身を、自然を、世界の万象を知性によって理解していることは、科学が発達した現在でも氷山の一角でしかないことは事実であろう。人間が知り得ることはそれらのほんの一部でしかない。その限られた知識によって人間の生存を左右するような倫理的判断を行うということは厳に慎まなければならないことであろう。パーソン論に内包される過剰な知性主義に基づく抽象的で単純化された人間理解によって、しかも一面的な人間理解によってある人たちの生存の危機を導く可能性がある。キテイが、シンガーやマクマハンを批判したように、彼らは知性に対して謙虚さが欠けていたのかもしれない。

さらに、マクマハンが動物擁護の主張をする時に、重度の知的障害者を動物と比較することについて、キテイは感情的に受け入れることができない。そもそも人間は理性と感情をもった存在である。「倫理」とはその人間が理性的・感情的に納得し受容でき、長年にわたり社会的に合意形成され蓄積してきた規範の集成である。生命に関する倫理は、理性的・合理的に共有されるだけでなく、感情的にも共有されることが求められるのではないだろうか。

最後に、知性の巨匠であるアインシュタインは過剰な知性主義について以下のような警告を発している（NHK総合、2022）。

心理と知識を探究することは人間性の中で最も価値のあるものの一つです。しかし私たちは知性を神格化しないように十分に注意しなければなりません。知性はもちろん強力な



力を持つてはいますが、人格を持つてはしません。知性は人間を導くことはできず、あくまでも人間に仕えるものなのです。人間が存在するために最も重要なことは破滅的な本能を遠ざけるようたゆまぬ努力を続けることです。

アインシュタインのこのような警告は、知性の先端である科学が人類の破滅を導いているという現実を認識しているからである。この警告に、シンガーやマクマハンたちのようなパーソン論を唱える倫理学者が謙虚に耳を傾けることが求められる。

## 注釈

- 1) 広辞苑では人格を①人から、人品 ②ある個体の認知的・感情的・意志的および身体的な諸特徴の体制化された総体 ③道徳的行為の主体としての個人、自己決定的で、自律的意志を有し、それ自身が目的自体であるところの個人
- 2) 2016年に先天性の難病ミトコンドリアDNA枯渇症候群を発症したチャーリー・ガード君の両親が、入院していた病院から尊厳死を提案された。両親はアメリカで実験的治療を望んだが病院側と意見が対立し裁判となった。裁判では両親が敗訴し続け、チャーリー君は生命維持装置を外され死亡した。

## 引用文献

- DAILYSUN NEWYORK (2020) 現在も続く虐待の実態明らかに NY州立の発達障害施設の出身者. [dailysunny.com](http://dailysunny.com).
- 江口 聡 (2014) 「パーソン論」はその後どうなったの？. 我々と同じ将来説、動物説、そして時間相対的利益説, 京都女子大学現代社会研究, 17, 95-108.
- Fachen, R. R & Beachamp. T. (1986) A History and Theory of Informed Consent. Oxford University. ルース・フェイドン, トム・ピーチャム (1994) インフォームド・コンセント. 患者の選択. みすず書房.
- 浜野研三 (2019) 「ただ人間であること」が持つ道徳的価値—相互に尊重しあう自由で平等な個人が築く民主主義—. 春風社.
- 廣松 渉・子安宣邦・三浦憲一・宮本久雄・佐々木 力・野家啓一・末木文美士 (1998) 岩波 哲学・思想事典. 岩波書店.
- Hopwood, M. (2016) 'Terrible Purity': Peter Singer, Harriet McBryde Johnson, and the Moral Significance of the Particular. *Journal of the American Philosophical Association*, 637-655.
- Johnson, H. M. (2003) Unspeakable Conversations. *The New York Times*.
- Johnson, H. M. (2006) Too Late to Die Young: Nearly True Tales from a Life. New York: Picador.
- 加藤尚武・加茂直樹 (1998) 生命倫理を学ぶ人のために. 世界思想社.

- 神奈川新聞取材班 (2022) やまゆり園事件. 幻冬舎文庫.
- Kittay, E. F. (1997) Equality, Dignity and Disability, Perspectives on Equality: Constructing a Relational Theory. Rowman & Littlefield pub inc.
- Kittay, E. F. (1999) Loves Labor: Essays on Women, Equality, and Dependency. Routledge. エヴァ・フェダー・キテイ (2012) 愛の労働あるいは依存とケアの生議論. 白澤社.
- Kittay, E. F. (2000) Relationality, Personhood, and Peter singer on the Fate of Severly Impaired Infant. The APA Newsletter on Philosophy and Medicine, Spring 2000.
- Kittay, E. F. (2005) At the Margins of Moral Personhood. Ethics 116 (1), 100-31.
- Kittay, E. F. (2005) When Caring is just and justice is Caring: Justice and Mental Retardation.
- Kittay, E. F. (2009) The Personal is Philosophical is Political: A Philosopher and Mother of a Cognitively Disabled Person Sends Notes from The Battlefield. Public Culture, 13 (3), 557-580.
- Kittay, E. F. (2019) Learning from My Daughter. Oxford University Press.
- 児玉真美 (2019) 「死ぬ権利」と「無益な治療」—命の選別と切り捨てへの力動の両輪として—. 科学技術社会論研究, 17, 55-67.
- Locke, J. (1689) An Essay Concerning Human Understanding. Awnsham and Jhon Churcil. ジョン・ロック (1968) 人間知性論, 世界の名著 ロック・ヒューム, 61~188, 中央公論社.
- Lohannes Paulus II (1995) Evangelium Vite. <https://www.vatican.va> ヨハネ・パウロ二世 (2008) 回勅 いのちの福音. カトリック中央協議会.
- McMahon, J. (1996) Cognitive Disability, Misfortune and Justice. Philosophy & Public Affairs. 25, 3-35.
- McMahon, J. (2002) The Ethics of Killing: Problems at the Margins of Life. Oxford University Press.
- 峯村優一 (2014) ジェフ・マクマハンの脳説における人の同一性問題. 医学哲学医学倫理, 32, 53-63.
- 中村暁美 (2009) 長期脳死 娘 有里と生きた一年九ヶ月. 岩波書店.
- NHK総合 (2022) アインシュタイン 科学者たちの罪と勇気, 4月11日放映.
- Rawls, J. (1971) A Theory of Justice. Harvard University Press. ジョン・ロールズ (1989) 正義論. 紀伊国屋書店.
- Singer, P. (1979) Practical Ethics. Cambridge University Press. ピーター・シンガー (1999) 実践の倫理. 昭和堂.
- Singer, P. (2009) Animal Liberation. David Kseler. ピーター・シンガー (2011) 動物の解放. 人文書院.
- Singer, P. (1993) How are we to live?. Random House Australia Pty Ltd. ピーター・シンガー (2022) 私たちはどう生きるべきか. ちくま学芸文庫.
- 玉井真理子 (1999) 新生児医療と生命倫理—「親による治療拒否」と「選択的治療停止」—. 医療と社会, Vol8, No4, 99-105.

- 田中雅美 (2021) 生存の限界といわれる子どもへの代理意思決定を担った母親の経験. 現象学的研究, 日本看護科学会誌, 41, 20-28.
- Taylor, S. (2017) *Beats of Burden: Animal and Disability Liberation*. The New Press. スナウラ・テイラー (2020) 荷を引く獣たち—動物の解放と障害者の解放. 洛北出版.
- Tooley, M. (1972) Abortion and Infanticide. *Philosophy & public Affairs*, 2, 1 (Fall), 37-65. トウリー, M (1988) 嬰兒は人格を持つか. *バイオエシックスの基礎*, 94-110, 東海大学出版部.
- 山本友三郎・浅井 篤 (2008) シンガーの実践倫理を読み解く. 昭和堂.
- 米本昌平・松原洋子・櫛島次郎・市野川容考 (2000) 優生学と人間社会. 講談社.

#### 参考文献

- エヴァ・フェダー・キテイ 岡野八代 牟田和恵 (2011) ケアの倫理からはじめる正義論—支えあう平等. 白澤社.